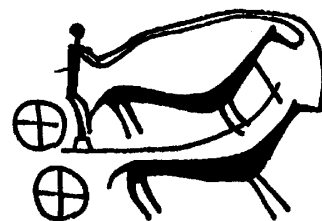


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 41



## 特集：2002年度のプロジェクト

高等教育開発研究部

技術と人間の倫理・PMFの響き・e-Learning (3~7ページ)

エッセイ <北大旧教養教育の評価> 藤田 正一 (16ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

### 巻頭言 FOREWORD

## 学生のための生涯学習を目指して

生涯学習計画研究部長 徳田 昌生

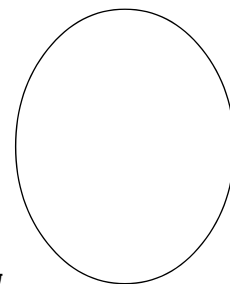
このたび小出達夫前部長のあとを継いで生涯学習計画研究部の部長を務めさせていただくことになりました。生涯学習については私自身は専門家ではありませんが、最近さまざまな話を聞く機会や考える機会がありましたので、生涯学習計画研究部の果たすべき役割と重要性について考えてみたいと思います。

### ミネソタ大学 Extension Classes

本年2月に発行されたセンターニュース第40号に小出先生が2年間を振り返り、部長就任当時は「生涯学習計画研究部は何をしているかわからない」、「北大にとってどんな意味があるのか」という類の

話をよく聞いたと書いておられました。私自身も、実状を知らないが故にそのような印象をもったことがあります。このたび生涯学習や生涯教育に取り組むことになりましたが、私が20数

年前文部省在外研究員としてミネソタ大学に滞在した時に外国人受入窓口で渡された1冊の冊子「University of Minnesota Bulletin, Extension Classes 1978-79」のことをふと思い出しました。その中に、当時の学長によって述べられた「私は“継続教育”と“一般教育”を区別して考えることは誤りであるはず」と思ってい



た。学ぶことは一生涯続けるべきことであり、その意味ではすべての教育は“継続的”であると言える。」という言葉を見つけることができました。480頁の冊子には継続教育システムとしての各種コースや科目等が示されており、例えば私の専門とする化学では「化学概論」「物理化学概論」「定量分析」「基礎有機化学」「基礎有機化学実験」の5科目が提示されていました。全分野にわたって多数の科目が用意されており、州立大学として地域や社会の要請に積極的に応えようとする姿勢が強く感じられた次第であります。

## 日本における生涯教育

我が国では1981年に中央教育審議会から「生涯教育について」の答申が出され、さらには臨時教育審議会は教育改革の重要な柱として「生涯学習体系への移行」をあげ、1990年になって「生涯学習の振興のための施設の推進体制等に関する法律」（通称、生涯学習振興法）が成立し政策的取り組みが進められるようになりました。高等教育機関でも生涯学習に関する研究や公開講座などの実施を行うセンターが認められるようになり、本学においても1995年に生涯学習計画研究部が高等教育機能開発総合センターに設置されました。国立大学の中では非常に早い時期での設置であったようであります。

## 本学における生涯学習

生涯学習計画研究部は、設置当初から部長と三人の専任教官によって公開講座や地域連携の各種セミナーの開催あるいは大学放送講座への協力などが精力的に展開されてきました。最近では「道民カレ

ジ」や「さっぽろ市民カレッジ」などにも積極的な支援を行っております。北海道にある国立大学として社会との連携をさらに深めるために、学内教官に中学・高校生あるいは社会人を対象とする講義テーマを提示・登録していただき、それをホームページ上などに掲載して受講希望の学校や団体の要請に応えるシステムを考えたいと思っております。

一方、2年程前から在大学生を対象とする生涯学習・生涯教育の取り組みが進められるようになりました。学生が卒業後社会で活躍し社会に貢献するためには、社会をできるだけよく知って学ぶ必要があります。また、生涯にわたって学習して行くための基礎となる知識、考え方、能力、心構えなどを身につけることも重要であります。入学者が多様化し勉学意欲を喪失する学生が増加する中で、学生を生涯学習者（Lifelong Learners）としてとらえて教育することはひとつの道であります。そのために、全学教育特別講義「大学と社会」の充実、インターンシップ制度の拡充、あるいは専門分野の異なる学生がグループを形成して行政や産業界から提示された課題を解決して行く演習科目（ポर्टランド州立大学で行われているキャップストーン・プログラム）の導入などを推進して行きたいと考えております。重点化された大学として大学院生のインターンシップも重要だと思っております。

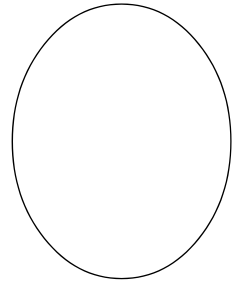
高等教育機能開発総合センターには生涯学習計画研究部の他に高等教育開発研究部と入学者選抜企画研究部があり、3部が密接な連携を取って教育の改革に取り組んでおります。学内諸先生の協力を得て学生のための充実した教育を進めたいと考えております。

# 特集：2002年度のプロジェクト

## 高等教育開発研究部

高等教育開発研究部長 小笠原 正明

センターの研究組織としての本研究部には、(1)高等教育の在り方に関する研究、(2)教授法の研究、および(3)教育業績評価の研究(順不同)という3つの任務があります。この任務を果たすため、毎年、教官を対象とした「北海道大学教育ワークショップ」や「新任教官研修会」、また大学院学生を対象とした「TA研修会」を主催する一方、本研究部は広く学内外に呼びかけて「コアカリキュラム研究会」や「教育評価研究会」などのプロジェクト研究を推進してきました。本年度の研究活動は、高等教育開発研究委員会やセンター運営委員会における審議の結果、以下の3つのプロジェクトを中心に行われることになりました。



### プロジェクト1： コアカリキュラム「科学・技術の世界」の教育プログラム 「技術と人間の倫理」の実施へ向けて

北海道大学においては、01年度より初年次教育を中心にコアカリキュラムが実施されています。コアカリキュラムを構成する科目群および科目は、普遍性の高い学問分野を基礎におきながら、社会が直面する問題に関連する事項について、学生と教師、また学生同士が討論し考察することを目指しています。

#### 現代人に必須の素養

「科学・技術の世界」は、コアカリキュラムを構成する科目群の1つであり、現代社会に生きる人間に必須の科学的素養を身につけるためのプログラムです。本学の全学教育においては、「科学そのもの」は「基礎科目」が担当しています。このことを考慮すれば、分野別科目「科学・技術の世界」の教育目的は、?科学・技術の社会的・歴史的位置づけと?科学・技術の諸分野を総合する視点の獲得の2つを中心に設定されるべきであることは明らかです。

技術者は科学・技術と社会とのインターフェイスの役割を課せられています。技術者の職業的な使命・役割・責任は、人間社会の倫理と密接に関係しています。これまで、日本の大学教育においては、技術者の倫理の問題は組織的に取り組まれてきませんでした。これからは文系・理系を問わず必須の教育テーマとなるでしょう。01年度から開始されたプロジェクト「コアカリキュラムにおけるSTS科目の研究会」は、「技術と人間の倫理」を教養科目の分野別科目「科学・技術の世界」の重要なテーマとして取り上げることを提案しました。本年度はその実施に向けて具体的な授業計画や実施組織の在り方を検討します。

#### 原理教育と事例研究

専門的な職業人の国境を越えた自由な活動が行われ、技術や規格基準の国際化が進むとともに、国際

的に通用する倫理観を身につけていることが、専門的職業人として受入れられるための必須の条件となりつつあります。すでにさまざまな分野において、社会との接点にある技術者集団は、独自の倫理綱領を持っています。例えば、工学分野では、日本機械学会、日本建築学会、土木学会、電気学会、情報処理学会などの主要な学協会が、倫理綱領や行動規範を明示しています。また、綱領が明示されていなくても、伝統や習慣から出来上がった倫理規範が機能している場合が大部分です。

一方、具体的に問題となった事象を、倫理的に正しく解決するための筋道は多種多様であり、しかも完璧な解決をはかることは難しい場合が大部分です。したがって、専門的職業人（工・農・薬などを含む）が技術者としての職業的自律と権威を確立するためには、普遍的な基礎的倫理の教育とともに次のような訓練が必要です。すなわち、普遍的な原理に加えてそれぞれの技術・職業に固有の倫理があることを理解したうえで、さらにケース・スタディー（事例研究）を経験しなければなりません。このような教育は、知的な市民を育てるために、文系学生に対しても必要とされています。

具体的な技術倫理の授業は、

(1) 倫理的原理の理解とそれへの反省  
 (2) 基礎的論文の読解を含む事例研究

の2本の柱より構成される必要があります。この中で、とくに事例研究は、過去の具体的な事例(case)を通して、どのような科学技術の貢献が社会に成功や信頼を導き、どのような判断や行為が社会に害を及ぼしたかを客観的に分析し、他者との討論を通して自分自身の意見・判断を形成していく重要な教程です。事例研究には、対象としている問題の倫理的な解決策を学ぶことによって分析能力が高まる、問題解決のためになされた努力が重要な知的いとなみであることを自覚するようになる、などの教育効果があります。

実際の授業は、工学、理学、農学、薬学などの技術関係分野の専門家のみならず、哲学者、経済学者、法学者が参加して、学際的な体制で設計され、実施

されることが望ましいと思います。

## 授業計画の一例

全体で360名規模の授業を想定しています。02年度中に完成が見込まれる「シアター・コンプレックス（大講堂と12程度のゼミ用の小教室を組み合わせた教育施設）」を使い、大講堂での講義、小教室での事例研究など討論を中心とした授業を設計します。

1つの例として、以下のような授業計画が提案されています。

(1) 技術と人間の倫理序論（大講堂）

(2) 事例研究1（大講堂 小教室）

例：チャレンジャー号事故、阪神淡路大震災（個人の決断と危機管理システム）

(3) 事例研究1に関するプレゼンテーションと討論（大講義室）

(4) 事例研究2（小教室）

例：フォードのピント事件、サリドマイド事件（組織およびジャーナリズムと技術者倫理）

(5) 事例研究2に関するプレゼンテーションと討論（大講義室）

(6) モラル・セオリー1（大講堂）

(7) モラル・セオリー2（大講堂）

(8) 事例研究3

例：廃棄物処分問題（市民としての技術者倫理）（小教室）

(9) 事例研究3に関するプレゼンテーションと討論（大教室）

(10) 経済活動と環境保護との間の倫理的ディレンマに関する文献研究（小教室）

(11) 環境保護と技術に関する討論（小教室）

(12) 総括；地球市民としての技術者の義務と責任（大講堂）

ここで（大講堂）などの記述は、講義が行われる場所を示し、矢印を含むものは、最初に大講堂でオリエンテーションを受け、小グループ討論のために小教室に移動することを指します。また、（組織と技術者倫理）などの記述は、討論における課題を指します。小グループ討論においては、その問題を専

門とする教官ないしはTAが参加して討論を指導します。本年度は、このような授業を実施するための組

織の研究、資料集の編集などの作業をおこなう予定です。

## プロジェクト2： コアカリキュラムにおける芸術科目の研究 教養科目「PMFの響き」を中心に

教養教育の分野別科目として、「芸術と文学」がコア（必須科目）として設定されています。しかし本学には芸術を専門とする部局が存在せず、このコアの具体的内容については、引き続き全学的な支援のもとに検討を続ける必要があります。本研究部は、責任部局の文学研究科の要請を受けて、01年度から「コアカリキュラムにおける芸術科目の研究」のプロジェクトをスタートさせました。

### 芸術科目のモデル授業

最初の1年で教育理念などを検討し、2年目で具体的な授業内容を提案する予定で研究が進められていましたが、本年度のカリキュラムの編成過程で、

芸術分野のある科目の集中講義がキャンセルされたため、急遽、全学委員会小委員会より、急遽、支援の要請がありました。これを受けて、本プロジェクトグループは、「芸術と文学」の科目責任者である文学研究科の山田貞三教授に加わっていただき、計画を前倒しして授業を開講することにしました。すなわち、札幌地域の芸術関連施設や組織との連携授業の1つとして計画されていたパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）との提携授業「PMFの響き」を、芸術科目のモデル授業としてon the job方式で研究することにしました。以下に、このプロジェクトで議論されている教育理念の一部と、「PMFの響き」のシラバスを紹介します。

## 理念に関する議論

### <教養としての意義>

芸術科目は直接的な実用性から開放されているという意味で正統な自由学芸 (Liberal Arts) に属し、いかなる専門分野に身をおくにせよ、高等教育を受ける者が学ぶに値する教養である。芸術鑑賞の能力を高めることや、鑑賞した内容を表現する力を養うことは、刹那的な娯楽とは区別された意味での、精神的価値を有する教養である。

### <生涯学習>

多感な青春時代に芸術に接することは人格形成に有意義であり、その後の人生において心豊かに実生活を送る糧となる。その意味で、芸術科目は生涯学習の一翼をになう。

### <専門分野への創造性賦与>

芸術科目で養われる感性、鑑賞・批評能力 (審美眼)、想像力を、創造的に専門分野での勉学、研究に役立てる。感性や想像力を介して、芸術はあらゆる領域の学問を隣接しており、創造性を賦与する。

### <芸術学研究者の発掘>

学生が潜在的に持つ芸術への関心を引き出し、芸術研究を志す者を発掘する。そのために、文献学など芸術研究の学問的方法や、レポート・論文の作成法など研究成果のまとめ方を教授することも重視する。「芸術とは何か」という深遠高邁な問題についても、「正解」ではなく探求方法の教授につとめる。

### <社会への還元>

文化・芸術の振興という観点からすると、高等教育機関が芸術の理解者を恒常的に育成することは今や社会的使命である。芸術系大学に限らず、広く一般大学が自覚的に芸術教育を行わなければ、実社会における芸術の発展も望めない。芸術科目は、社会の福利増進という大学本来の存在理由からしても有意義な教育ジャンルであり、コアカリキュラムに含まれるべき必然性を有する。

## 「PMFの響き」のシラバス

地域連携授業のモデルである「PMFの響き」は、本年度の第1学期に以下の内容で開講されます。

授業科目名：全学教育科目芸術と文学

対象学年：1, 2年生

開講時期：6 - 7月

単位数：2

対象クラス：全クラス、全学科 (40人未満)

授業の目標：毎年札幌を中心に開催される国際的な音楽祭PMF (Pacific Music Festival) の現場をとおり、生の音楽に触れるだけでなくそれに携わる人々と直接関わることで、音楽及び音楽祭というイベント全体の奏でる響きを堪能する。

到達目標：音楽文化を多面的に捉えることで、専門教育及び卒業後の生活の中で感性豊かな人間を自ら創造するような自己形成の基盤を築く。

評価方法：クラスへの貢献度、レポート1本

出欠の取扱：3分の1以上の欠席は不可

授業計画：

- (1) 6月18日 (火) 講演? : 三浦 洋
- (2) 7月2日 (火) 講演? : 「PMFの歴史と現状 (仮題)」竹津宣男 (PMF オペレーティング・ディレクター)
- (3) 7月6日 (土) 札幌芸術の森屋外ステージ、開会式 / 記念演奏、バーンスタイン：音楽芸術学院創立25周年ファンファーレ他 (オプショナル)
- (4) 7月7日 (日) 札幌コンサートホール「キタラ」、モーツァルト：交響曲第39番変ホ長調K. 543他 (必須)
- (5) 7月10日 (月) 講演? : 「PMFとボランティア」、赤石知恵子 (PMFボランティア団体「ハーモニー」)
- (6) 7月13日 (土) 札幌コンサートホール「キタラ」、ストラヴィンスキー：火の鳥；ショスタコーヴィチ：交響曲第5番二短調作品47 (必須)
- (7) 7月15日 (月) 講演? : 三浦 洋
- (8) 7月20日 (土) 札幌コンサートホール「キタラ」、モーツァルト：オーボエ四重奏曲へ長調K. 370他 (必須)
- (9) 7月22日 (土) 講演? : 三浦 洋
- (10) 8月9日 (金) 全学教育レポートボックスの締切り

## プロジェクト 3 : e-Learning システム導入のための研究

本研究部は、1996年から大学教育におけるメディア利用についてプロジェクト研究をおこなってきました。また、00年度の科学研究費プロジェクトの研究過程で、アメリカの大学におけるe-Learningソフトの爆発的な普及に衝撃を受け、専任教官の細川助教授が中心となってこの新しい教育法を実践するための研究を続けてきました。昨年末に、情報担当の井上副学長の提案を受け、すでに先駆的な試みを行っている情報メディア教育研究総合センターや国際広報メディアのスタッフを主要なメンバーとして、e-Learningの研究グループをスタートさせました。

### 研究の展望

WebCTなど強力なe-Learningのソフトを利用した情

報ネットワークは、大学間の情報格差をなくすだけではなく、個々の教育現場、すなわち授業におけるコミュニティづくりを助け、それを活性化するという機能があります。ホームページ、掲示板、メーリングリストなどを組み合わせたシステムは、単に授業にメディアを取り入れるというレベルを越えたインパクトを高等教育にもたらしつつあります。

e-Learningソフトの普及とともに、「いつでも、どこでも、誰でも学べる社会」がもうすぐ実現しようとしています。

本研究会では、来年度の導入を視野に入れながら、このようなe-Learningの理想を実現するソフトや教員の支援のための組織の在り方などについて、早急に検討を進める予定です。

表 1 2002年度高等教育開発研究部研究員一覧

高等教育開発研究部 22名  
(学内 18名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ	区分
瀨名波栄潤	文学研究科助教授	英文学	コアカリキュラムにおける芸術科目の研究	継続
堀田真紀子	言語文化部助教授	表象基礎論	"	"
常田 益代	留学生センター教授	美術史および建築史	"	"
北村 清彦	文学研究科助教授	美学・芸術学	"	"
新田 孝彦	文学研究科教授	倫理学	コアカリキュラムにおけるSTS(科学・技術・社会)科目の研究	"
大野 栄三	教育学研究科助教授	教育計画	"	"
吉田 文和	経済学研究科教授	現代政策	"	"
杉山 滋郎	理学研究科教授	科学史	"	"
岸浪 建史	工学研究科教授	システム情報工学	"	"
三浦 清一	"	社会基盤工学	"	"
高橋 英明	"	金属表面処理工学	"	"
渡邊 智	医学研究科助手	解剖・組織学	e-Learning研究会	新規
安住 和久	工学研究科助教授	界面制御工学	"	"
高野 伸栄	"	都市環境	"	"
伊藤 直哉	国際広報メディア研究科	言語文化政策	"	"
高見 敏子	言語文化部講師	コーパス言語学	"	"
岡部 成玄	情報メディア教育センター教授	情報教育	"	"
野坂 政司	"	表現文化論	"	"

(学外 4名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ	区分
阿部 和厚	北海道医療大学教授	解剖学	コアカリキュラムにおける芸術科目の研究	継続
三浦 洋	千歳科学技術大学(非常勤講師)	哲学	"	"
谷本 一之	アイヌ民族研究センター所長	民族音楽	"	新規
川村 武	北見工業大学工学部講師	電子工学	e-Learning研究会	"

## センター CENTER

### 新しい研究部長とセンター長補佐きまる

4月より、高等教育研究開発研究部長に小笠原正明部長が再任され、新生涯学習研究部長に徳田昌生教授（工学研究科）、新入学者選抜企画研究部長に加茂直樹教授（薬学研究科）が就任されました。ま

た、安藤厚教授（文学研究科）と長谷部清教授（地球環境科学研究科、任期は5月1日から）が新たにセンター長補佐に就任されました。

### 6月6日に新任教官研修会

今年度の新任教官研修会が6月6日（木）の開学記念日に行われます。対象は、昨年6月1日以降に本学に赴任された教官全員です。この研修では、北大の建学の経緯、教育理念や教育的伝統、本学の全国的あるいは国際的な役割、将来への展望について理解を深めます。さらに、これからの大学において必須とされている「双方向的授業」のための実践的な訓練や、国立大学の法人化、セクシャルハラスメント、学生への学習指導や心のケアなどに関する講演、パネル討論が用意されています。新任以外の教官も参加できますので、あらかじめご連絡下さい（高等教育機能開発総合センター Tel: 706-7520）。

日時：2002年6月6日（木）

会場：情報教育館3Fスタジオ型多目的中講義室

主催：高等教育機能開発総合センター

#### <プログラム>

- 9:15 受付開始
- 9:30 挨拶：中村睦男（総長）
- 9:35 講演：「北大の教育 これまでとこれから」

徳永正晴（副学長，センター長）

ミニ講義：「ファミリーストーリーとしての  
大学史」

小笠原正明（高等教育開発研究部長）

10:20 休憩

10:30 講演：「国立大学の法人化をめぐる」

常本照樹（法学研究科教授）

11:00 パネル討論：大学生の指導の心得

司会：逸見勝亮（教育学研究科長）

パネリスト：植木迪子（文学研究科）

道幸哲也（法学研究科）

小林理子（保健管理センター）

12:00 昼食

13:00 ミニ講義：「双方向的な授業の実際について」

細川敏幸（高等教育開発研究部助教授）

13:20 グループ討論

14:20 総合討論

司会：西森敏之（高等教育開発研究部教授）

15:00 散会



# 全学教育

GENERAL EDUCATION

## 2002年度の検討課題 第44回全学教育委員会開催される

4月23日(火)に第44回(平成14年度第1回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

議題1. 全学教育委員会小委員会委員の構成

議題2. 学生問題担当委員の選出

議題3. 平成14年度全学教育委員会の検討事項

報告事項1. 附属図書館北分館委員

報告事項2. 履修調整

報告事項3. クラス担任のオフィスアワー

報告事項4. 一般教育演習のガイドライン

報告事項5. 流用定員解消に伴う全学教育(実験系)に関するWGからの報告

### 小委員会委員などを選出

議題1については、全学教育委員会小委員会委員がつぎのように決まりました。

文学部 安藤 厚(センター長補佐/委員長)

工学部 高橋英明(センター長補佐)

理学部 長谷部清(センター長補佐)

文学部 栗生澤猛夫

教育学部 姉崎洋一

理学部 高畑雅一

歯学部 中村太保

薬学部 森美和子

言語文化部 竹本幸博

議題2では、学生問題担当委員が田口正樹委員(法学部)と恒川昌美委員(工学部)に決まりました。

### 全学教育スタッフ室の整備

議題3では、平成14年度全学教育委員会の検討事項(案)が提案され、徳永委員長、安藤センター長補佐からの説明と質疑のあと、今後各項目について小委員会で検討のうえ順次委員会で審議することが

了承されました。

1. 全学教育科目の充実について

(1) コアカリキュラムを基にした授業計画

(2) 履修調整

(3) 学部との連携

(4) 履修登録の上限設定の検討

2. 全学教育支援体制の構築について

(1) 科目責任者会議の運営

3. シラバスの在り方について

(1) 内容の充実

(2) シラバス検索に関する改善事項

(3) 入力作業等の改善事項

(4) シラバスのペーパーレス化

4. 全学教育における施設・設備の充実

(1) 全学教育スタッフ室及び演習室等の整備・充実

(2) 視聴覚機材(OHP,資料提示装置等)の整備

5. 履修指導について

(1) 全学教育科目の履修指導

(2) クラス担任による指導

(3) 履修相談, オフィス・アワーの設置

6. 全学点検評価報告書(学業成績評価関係)に盛り込まれた課題について(3.シラバスの在り方との関係)

(1) 成績評価基準の明確化・公開の措置

(2) 学業成績評価の意味について学生への周知徹底

7. 流用定員解消に伴う全学教育について

8. 医学部保健学科設置に伴う全学教育について

### クラス担任のオフィスアワー実施

報告事項1では、委員長から、附属図書館北分館委員に小野浩委員(経済学部)、梅村孝司委員(獣医学部)を推薦したことが報告されました。

報告事項2では、安藤センター長補佐から、一般教育演習、大講堂・S2講義室での履修調整の結果が報告されました。

報告事項3では、委員長から、2月21日開催の本委員会で新入生の修学上の問題などに応じるためクラス担任にオフィスアワーを設けるようクラス担任会議で要請したいと報告したが、その後小委員会で検討し、3月22日開催のクラス担任代表者会議および全体会議で了承を得、クラス担任全員にオフィスアワーを設けていただき、新入生に掲示で周知したことが報告されました。

報告事項4では、委員長から、高等教育研究開発

部を中心に多数の先生方のご尽力により「一般教育演習のガイドライン」が完成し、全教官に配布したことが報告され、小笠原研究開発部長から、その内容について説明がありました。

報告事項5では、委員長から、2月21日開催の本委員会に流用定員解消に伴う全学教育（実験系）に関するWGからの報告が提案されたのを受けて、理学部の科目責任者にこの報告の内容を検討してもらっていること、今後各学部でもご検討いただき、次回以降の委員会で審議をお願いしたいとの報告がありました。

（安藤厚 文学研究科教授・センター長補佐）

表2 2002年度全学教育科目責任者名簿

科目責任者の名称	所 属	職 名	氏 名
「健康と社会」企画責任者	教育学部	教 授	森 谷 敏 夫
「体育学」企画責任者	教育学部	”	鈴 木 孝 治
「思索と言語」企画責任者	文学部	”	中戸川 義 和
「歴史の視座」企画責任者	言語文化部	講 師	川 崎 祥 輔
	文学部	教 授	河 内 真 紀*
	法学部	助教授	野 村 真 紀*
「芸術と文学」企画責任者	経済学部	教 授	田 中 慎 一
	文学部	”	山 田 貞 三
	言語文化部	”	井 上 和 子
「社会の認識」企画責任者	文学部	”	井 煎 孝 孝
	法学部	助教授	野 村 真 紀*
	経済学部	教 授	岡 部 洋 實
「科学・技術の世界」企画責任者	文学部	”	小 野 芳 彦
	理学部	”	杉 山 滋 郎
「心理学実験」企画責任者	文学部	”	阿 部 純 一
「統計学」企画責任者	経済学部	”	長 谷 川 光
「数学」企画責任者	理学部	”	辻 下 徹
「物理学」企画責任者	理学部	助教授	市 川 瑞 彦
「化学」企画責任者	理学部	教 授	井 川 駿 一
「生物学」企画責任者	理学部	助教授	若 原 正 己
「地学」企画責任者	理学部	”	在 田 一 則
「情報処理・情報科学」企画責任者	工学部	教 授	大 内 東
「図形科学概論」企画責任者	工学部	”	奥 俊 信
「英語」企画責任者	言語文化部	”	竹 本 幸 博
「ドイツ語」企画責任者	言語文化部	助教授	佐 藤 俊 一
「フランス語」企画責任者	言語文化部	教 授	西 昌 樹
「中国語」企画責任者	言語文化部	助教授	杉 浦 秀 一
「中国語」企画責任者	言語文化部	教 授	高 井 潔 司
「英語等」企画責任者	言語文化部	”	古 賀 弘 人
「日本語・日本事情」企画責任者	留学生センター	助教授	山 下 好 孝

\* 任期は2002年4月1日から2003年3月31日まで。その他は2001年4月1日から2003年3月31日まで。

## 「一般教育演習のガイドライン」を配布

一般教育演習は、新入生が新しい環境に親しみ大学の勉学へのすみやかな移行を助けるために設けられ、年間140コマが開講されている少人数教育です。これまでその講義内容を考えるにあたり参考となる資料はありませんでした。そこで、昨年度実施された教育ワークショップ（FD）のなかで、一般教育演習のガイドラインづくりが行われました。重ねて3月にワークショップを行い、内容を吟味精選して、今回発行することとなりました。このガイドラインは全学の講師以上の教官に配布されました、今後の一般教育演習の発展に寄与することが期待されます。また、付録として、『「書く力」をつけるための指導』が添付されていますので、学生の日本語の文章能力の向上の指導にご利用下さい。

## TA研修会開催される

4月5日情報教育館3階スタジオ型中講義室を主会場に、TA研修会が開催されました。TA研修会は、全学教育にTAとして参加する大学院生を主たる対象として、TAの資格を得るための研修の一部として実施されています。学部TAも事前に登録すれば参加できます。今年は5年目で、TA任用者はのべ400名近くになり、研修該当者も180名（学部から24名）におよびました。このうち、約140名が参加し、108名が最後のセッションまで参加しました。

TA研修会のプログラムは表3のとおりで、午前中は総長の挨拶の後、小笠原高等教育開発研究部長が全学教育の意味と構成を、西森教授が教育の基本的なしくみを解説し、瀬名波助教授が米国でのTA経験をもとにした理想のTA像についての講演を行いました。最後にパネルディスカッションを設け、複数の教員とTA経験者の目から見たTAの意義と役割について議論が交わされました。

昨年度からTAの配置される科目の範囲が拡がり、従来の実験系と非実験系を分けたセッションだけでは対応しがたくなりました。そこで、本年度は、TAの配置される科目を5グループ（講義、実験、一般教育演習、語学、情報処理）に分割して午後のセッションを実施しました。それぞれのセッションの概要と、最後に回収したアンケートの集計結果を次に紹介します。

### 科目別セッション

講義： このセッションでは、まず、「書く力をつける為の指導」（西森）、「レポートの評価方法」（瀬名波）の二つのミニ講義が行われました。次に、（1）感想文の添削とコメント、（2）論文の評価とコメント、のふたつの課題について小グループ討論を行い、最後に全体発表・討論で締めくくりました。課題（1）では15人の参加者を3グループに、課題

(2)では20人を3グループに分けました。教材には去年の授業で実際に提出されたものを使い、実践的なトレーニングでした。担当者(西森:数学,瀬名波:文学)もTAも専門が異なり,他分野の人達と話が出来て良かったというTAの感想でした。

語学: 最初に導入として教員から簡単な講義が行われました(竹本・渡辺)。竹本教授は,米国のTAと日本のTAとの違い,及びその違いが制度の歴史に拠ることを紹介しました。つまり,TAは日本ではまだ新しく,特に労働報酬面で日米の差は大きく,使う教師側にもTAの側にもその業務内容が明確に認識されていないことです。次に,渡辺助教授から,過去の例に基づいて望ましいTA,及び授業参加への具体的提言がありました。全般的なことから服装,態度に至る諸点に有益でユーモア溢る指摘と助言でした。最後に参加者の中から,TA経験者数名の経験談,反省,提言が披露され,それに対する討論,二人の教員からの意見,引き続いて,多くの参加者から熱心な質問と意見交換が交わされました。最後に出勤簿への押印を忘れないこと,4月,5月分は支払いが遅れることの連絡をもって実りあるセッションは終了しました。

情報: 最初に教員による,北大における「情報処理教育」および「TAの位置付け」に関するショートレクチャーが行われました。さらに,TA経験者による体験談の後,グループ討論を行いました。参加TAが少人数ということもあり,教員およびTA経験者も参加し,「ネットワークの不正アクセスの背景となる要因とその防止策」をテーマに,特に,学内で起こり得る事態を中心に議論しました。不正アクセスの「背景」としては,主に,?コンピュータ利用者のパスワード秘守に関する認識の甘さ,?管理側の脇の甘さ,?不正アクセスによるユーザーのメリット(提出課題の複写,出席メール代返等)の発生,の3点が挙げられました。また,その「防止策」としては,?セキュリティの技術的な強化,?発覚時の罰則の明言,などが効果的であろうという結論に達しました。討論では忌憚の無い意見が飛び交い,非常に有意義な研修となりました。

一般教育演習: このセッションには29名が参加し,2番目に大きなセッションになりました。5つに分かれて行われたグループ討論では,1)どのようにしたら,学生とのコミュニケーションが可能か,2)どのようにレポートを評価するか,3)どのようにしたら,教室外での文献や情報の調査ができるようになるか,がテーマとして設定されました。昨年度に開講されたある授業で提出されたレポートを例として,3つのグループがレポート評価の基準について検討しました。レポートのオリジナリティーとは何か,論理的文章とは何か,どのようにしたら知的な刺激を与えることができるかなどについて,活発な議論と発表が行われました。

実験: このセッションには21名(内3名は学部TA)が参加し,最初の30分間のショートレクチャー「学生実験におけるTAの役割」(米山)の後,4グループに分かれグループ討論が行われました。それぞれ,1)プレゼンテーションの指導のポイント,2)事故が起きた場合の対処でどのような点が重要か,3)実験の原理をどこまで理解させるべきか,4)実験を安全に行うためにどのような点に注意すべきか,がテーマとなりました。およそ50分間で,各グループの構成員はお互いに理解しながら議論を進め,3分間の発表を行いました。最後に全体の討論を行い,いくつかの共通する問題点が提起されました。中でも,実験科目が高校で履修されていない場合どうすればよいかとの質問があり,理科3教科の履修問題がTAの間でも深刻になっていることがうかがえました。

## アンケートの回答結果から

TA研修会で行ったアンケートの質問の中から「本日のプログラムの中でもっとも有益だったのはどれですか。理由もお書き下さい」に対する回答を簡単に紹介します。参加したTAの評価が高かったもの3つについて,午後のセッション参加者別にまとめたものが表3です。それぞれについて,良かった理由の回答例を示します。

「私のTA体験」(瀬名波)

- ・実体験に基づいての話なのでわかりやすかった。
- ・いろいろTAについてのお話を聞き、TAになる心構えと準備について学びました。役にたつと思います。これから頑張りたいと思います。
- ・面白くて分かりやすかったです。

パネル討論

- ・具体的な話を聴くことができたから
- ・西堀ゆり先生のパネルは大変参考になりました。IT

と英語がここまで融合した授業が北大にあるということは全く知りませんでした。また、TAの存在は大きく、授業に影響を及ぼすものなのだと改めて認識できました。

- ・TA経験者の方や先生方からいろいろなエピソードが聞けてよかったです。
- ・実際に有益に機能しているTAの話聞いたのでよかった。
- ・様々なTAのあり方を知ることができたから。
- ・熊谷さんの話。同様の悩みがあり参考になった。

表3 2002年度北海道大学TA研修会プログラム

日時：2002年4月5日(金)	
会場：情報教育館3階スタジオ型中講義室(主会場)	
主催：高等教育機能開発総合センター	
<b>&lt;プログラム&gt;</b>	
9:15 受付開始	
-----	
9:30 挨拶 中村睦男 総長	
9:35 講演(25分)	
「北海道大学の全学教育」小笠原正明	
10:00 ミニ講義(20分)	
「大学教育の基礎について」西森敏之	
10:20 講演(30分)	
「私のTA体験」瀬名波栄潤	
10:50 休憩(10分)	
11:00 パネル討論(40分)	
「TAの可能性～果たして理想へ近づけるか」	
司会：瀬名波栄潤	
パネラー：西堀ゆり，中戸川孝治，清水賢一郎，熊谷由美子	
質疑応答(20分)	
-----	
12:00~13:00 昼食	
-----	
13:00 科目別セッション(150分)	
会場：3F中講堂，4F共用(1)，共用(2)，E210，E211	
一般教育演習【E211】：小笠原正明，鈴木誠	
講義：グループ学習の実際(15分)鈴木誠	
グループ作業：	
1. どのようにしたら，学生とのコミュニケーションが可能か？	
2. どのようにレポートを評価するか？	
3. どのようにしたら，教室外での文献や情報の調査ができるようになるか？	
講義【E210】：瀬名波栄潤，西森敏之	
講義：論文指導の実際(15分)西森敏之	
グループ作業：	
1. レポートを評価する(3グループ)	
2. 感想文の添削とコメント(3グループ)	
情報【4F共用(1)】：佐藤義治，吉田清隆	
講義：情報処理教育 吉田清隆	
グループ作業：	
1. ネットワークの不正アクセス行為の発生要因とその防止策について	
2. インターネット利用に関して要求されるマナー(著作権法等)について	
実験【4F共用(2)】：米山輝子，細川敏幸	
講義：実験指導とTAの役割 米山輝子(30分)	
グループ作業：	
1. 学生実験を安全に行うためにどのような点に注意すべきか？	
2. 学生実験で事故が起きた場合の対処でどのような点が重要か？	
3. 学生実験において実験の原理をどこまで理解させるべきか？	
4. プレゼンテーション指導のポイントは？	
語学【3F中講義室】：竹本幸博，渡辺浩司	
講義と討論：語学教育のポイント	
-----	
15:30 終了	

写真：総長のあいさつ

科目別セッション

- ・TAの交流が行えた。
- ・グループ討論はあまり経験がなかったので、多くの意見を聴いてとてもよい経験になりました。
- ・他分野の方々の話が聞けたからです。
- ・文系の授業をはじめて体験した。
- ・実際のレポートを添削できて面白かった。
- ・実際に作業することは、TAの直接の業務にない作

業でも生産的。

- ・実際、自分のやることが実感できました。
- ・短時間で一つのテーマについて話し合い、まとめることができ、充実感を感じることができた。
- ・TAを身近にかつ真剣に考えることができたから。
- ・他学部の人といろいろと議論することができてとても有益だったと思う。
- ・自分が学生だったら、このようなグループセッションをやってみたい。

表4 もっとも有益だったプログラム（参加セッション別）

	科 目			
	実験 (19名)	講義 (26名)	一般教育演習 (29名)	語学 (20名)
講演「私のTA体験」	1	4	0	11
パネル討論	6	3	2	5
科目別セッション	7	17	28	5

(複数回答可)

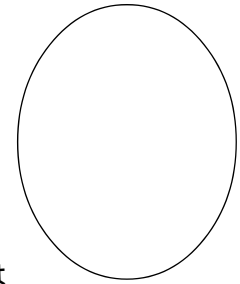
## 高等教育

HIGHER EDUCATION

### 客員教授にソウル大学の權斗煥氏

本年度の客員教授として、韓国の国立ソウル大学校（ソウル大学）から權斗煥（クォントゥファン）教授が着任しました。専攻は韓国古典詩歌文学と東アジア比較文学です。權教授は1970年にソウル大学の韓国語文学科を卒業し、1974年に碩士号（韓国の修士号にあたる）、1985年に博士号を取得しています。国民大学・同徳女子大学等の教員を経て1980年以降ソウル大学で教鞭をとり、1997年から4年余、

副学長（人文学部）や教務部長として韓国の国立大学改革政策の問題点の検討に携わりました。今回の滞在中には、研究大学におけるコアカリキュラムについて研究する予定です。權教授は来年2月まで11ヶ月間滞在されます。



## 生涯学習

LIFELONG LEARNING

### 「北海道地域インターンシップ推進協議会」設立される

去る4月12日（金）に、「北海道地域インターンシップ推進協議会」の設立総会が開催されました。この協議会は、北海道内の大学、短大、高等専門学校（以下、「大学等」という）が主体となり、関係諸機関の協力を得て、大学等におけるインターンシップを一層推進するために設立されたものです。

北海道内においては、1998年7月にインターンシップ導入に向けて産学官で構成する「北海道地域インターンシップ導入促進連絡会議」（座長：本学経済学研究科濱田康行教授）が設立され、モデル事業（平成10、11年度）及び大学等が主体となった事業（平成12、13）年度を実施しました。その結果、インターンシップを本格的に導入し、社会に定着させるためには大学等が主体となり組織的に取り組んでいくことが不可欠と判断し、上記の協議会が設立されました。今回、参加した大学等は、北海道大学、公立は

こだて未来大学、札幌学院大学、札幌国際大学、道都大学、北星学園大学、北海学園大学、北海道浅井学園大学、北海道教育大学、北海道東海大学、室蘭工業大学、釧路工業高等専門学校の計12校です。

同協議会の会長には本学の徳永正晴副学長が就任しました。また、協議会の事務局は大学等の持ち回りで担当しますが、02～03年度（平成14～15年度）は本学が担当することになりました。本年度は、夏休みを中心に7～11月にインターンシップを実施するとともに、これに係る調査の実施、シンポジウム、講演会の開催などを予定しています。本学では、4月下旬から同事業に参加を希望する学生を募集する予定です。

問合せ先：学務部厚生課就職情報資料室

TEL 011-706-3262

## 入学者選抜

ADMISSION SYSTEMS

### 新入生調査を実施

入試広報活動は、高校教育と本学の初年次教育とをつなぐ重要な役割を担っています。入学者選抜企画研究部は、入試広報に関する基礎研究の一環として、今年度の新入生を対象に質問紙調査を実施しました。調査票は、教務関係の書類とともに入学予定者全員に送付され、4月5日の新入生オリエンテーションの際に、クラス担任、各学部の教務課の協力

を得て回収されました。この調査の目的は、本学への進学動機、本学についての情報の入手方法、高校における進路情報の利用状況など、今後の入試広報活動の参考となる資料収集です。調査結果は、本学アドミッションセンターの多様な広報活動を改善するために活用されます。

## エッセイ

ESSAY

### 連載

### 少年老い易く学成り難し

### 北大旧教養教育の評価 個人的体験(1)

副学長，獣医学研究科教授 藤田 正一

1960年代後半アメリカでは環境問題が大きな社会問題と化した。私の留学していたオレゴン大学の学生達も敏感に反応した。ある時、彼等は数名の著名な教授と、アメリカンインディアンの男を招待して講演会を開いた。今となっては、有名な先生方の講演は全て忘れてしまった。インディアンの男は、砂漠に棲むトカゲについて話した。トカゲが乾いた土の上を這い回り、枯れ草をかき分け、岩上に登った……。彼はトカゲになりきって身ぶり手ぶりで、しかし、たんと話した。「環境問題」とは関係のない話であった。「一体なぜ主催者はこの男を招待講演によんだのだろう。」と当時思った。が、彼の話だけが私の記憶に残った。その後、環境問題を考える時、必ず彼の講演を思い出す。最も「環境問題」の本質に迫る、最も印象的な話であったのだ。

技術教育の成果はすぐに出る。評価も比較的短時間で行うことができるだろう。しかし、人間形成の肥やしとなるような教養教育の評価は短時間では測れない。肥やしがどのような樹を育てたか、成長した樹をみて初めて評価できるものだろう。教養教育を考えるために、北大の教養教育を受けてから後の、私の這い回る姿を曝け出して、北大の教養教育が私と言う人間を作る上でどのように効いているのかを考えてみたい。したがって、本ケーススタディの対象は私一人である。非常に偏ったサンプルであるかも知れないことをあらかじめ断っておく。

### 北大編

雪の津軽海峡を青函連絡船で渡り、函館本線の汽車に乗り込んだ。車窓から見える山地にはまだ厚い雪が残り、木々の根をうめていた。「北海道に来た

んだ。」これから始まるであろう大学生活への期待と、未知の土地と雪への憧れで胸が高鳴っていた。長万部で駅弁のそばを買った。実は私はそれまで、そばが嫌いであった。薬味のねぎとワサビとそれに、ウズラの卵をつゆに入れ嫌いなそばをすすった。う



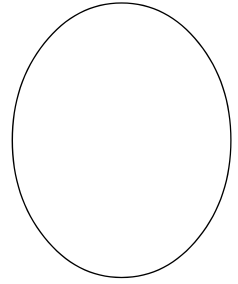
まかった。北大受験を決めてから、積極的に自分を変えようという意識に目覚めた。嫌いなそばをかう行為もそのささやかな実践であった。長万部のそば以来、そばが好きになった。

湘南高校2年の時であった。校長が我々を体育館に集めた。校長は、一つのグラフを示して言った。一昨年、去年、今年と東大合格者人数が年々増加している。君たちの年にはこのくらい合格してもらわなければ困る。校長は右肩上がりのグラフの延長線を指しながら言った。初代校長を真の教育者とたたえ、自分も優れた教育者であるとの自負を折に触れ明言する校長であった。東大を目指してはいたが、この校長の訓示には非常に腹が立ち、教育者が言うことかと、校長への見方をがらりと変えさせられる訓示であった。同時に、この人が行け行けと言っている大学に素直に行ったものかどうか疑問すら感じた。

3年生になった。それでもまだ東大を受けようと思っていた。高校の成績は芳しくなかった。ただ、当時東大受験生がよく受ける「東大文指の模擬試験」では200番そこそこをとっていたから、まだ合格圏内ではあったと思う。駿河台予備校の夏期講習を友だちと受けることにした。友だちは皆人気の午前の部を受けると言う。「俺は午後の部でいいや。」でも、友だちにつきあって、前日から徹夜で順番とりに列んだ。午後の部だから容易に席がとれた。列んだ夜、駿河台予備校の屋上で、浪人の学生が北大寮歌の「都ぞ弥生」を歌った。しびれるような感動を覚えた。これで私の受けたい大学は確定した。さっそく「都ぞ弥生」の入ったソノシートを買ってきて胸躍らせる寮歌を毎日聴いた。「ボーイズ・ビー・アンビシャスのクラーク先生の大学にいくんだ！」

長万部のそばを食ってからずいぶん時間がたって札幌駅に到着した。北大構内へ。中央ローンのはしにクラーク像を見つけた。写真で見たクラーク像だ。オオオニバスのレリーフとBoys, Be Ambitiousの文字が刻まれていた。まず泊まる場所をさがさねば。寝袋を持ってきたからどこでも寝ることができる。とりあえず寮に行ってみるか。聞けば仮宿と言うのがあって泊めてくれると言う。よかった。恵迪寮では各部屋がそれぞれクラブになっていると言う。「応援団が柔道部の部屋に泊めて下さい。」「応援団なら泊まれるだろう。」応援団の部屋に行った。応援団の部屋は2部屋あった。「学問所」と言う看板がかかった部屋には人がいなかった。勉強しないん

だな。隣の部屋をノックするとすざましい声で「おう」と返事。あけてびっくり、長髪ひげ面のむくつけきおのこどもが寝台の上に数人。床には新聞紙や紙屑が降り積もって、床板が見えない。そこにあの青年もいた。



当時、北大東京受験場と言うのがあった。私もそこで受験した。確か日大の文理学部の建物だったと思う。そこに、あの青年はいた。長髪、色白で澄んだ目。羽織袴に高下駄。恵迪寮の入寮案内を配っていた。私が見た最初の北大生の姿である。「俺の選択に間違いは無かった。」受験は気分爽快であった。

自己紹介をして一泊を請うた。そこに寝ていいと言う。しばらく話をしたら眠くなった。うとうとしていると、あの青年が、「おい、あいつ寒く無いか」と言うや、誰かがふとんをぼーんと掛けてくれた。空恐ろしい顔をした男達の優しさに触れた一瞬であった。あの青年は応援団長のSさん（現北大博物館長農学部教授）である。そして、御老体と呼ばれる1年留年しているY前応援団長（現北大農学部農芸化学科教授）と、数人の先輩達がいた。次の日の朝、だれかの目覚まし時計で目がさめた。ぱたぱたと学問所に駆け込む音、やがて英会話講座のラジオの音。ホー、応援団の先輩も英会話を勉強するんだ。A先輩であった。札幌医大の助手を経て、三菱化成に入社し、中標津血清の社長として数年前に北海道に戻ってきていたが、今回の狂牛病騒ぎの被害をマトモに受けて会社をたたむと言う。それから数日ののちU君、S君、T君、U君、M君、Y君らが応援団の部屋に入ってきた。これが疾風怒涛の時代の序章であった。

「寮歌指導じゃー。」憧れの寮歌を歌える。心躍らせながら娯楽室に集合した。「アインス・ツバイ・ドラーイ。」私も大声で歌おうとした。「都ぞ...」「みー やー こー ぞー...」私の知っている寮歌とは別物であった。より荘重で、荘厳ですらあった。新たな感動が...。北大生となった喜びに酔いしれた。やがて応援団の活動が始まった。毎日新しい寮歌を覚えた。覚えた寮歌を教養のクラスのみんなに教えた。夜にはよく部屋で酒を飲んだ。飲みながら次々に大声で寮歌を歌う。これが応援団のコンパであった。

応援団の先輩達は相変わらず優しく親切だった。

1年生の間は、どこへ食いに行っても飲みに行っても全部先輩のおごりだった。家から送金があると「おい行くぞ」と言って何かをおごってくれた。他大学の応援団のような軍隊調の上下関係は無かった。兄弟のような関係であった。これが、自由と平等を持ってきたクラーク先生の教えの伝統であると気づくまでにはずいぶん時間がかかった。

寮のベットで安眠をむさぼっていると、突如真夜中に大声で歌を歌いながら帰ってくるやつがいる。どこかで飲んで酔っぱらっているのだ。そんなことは日常茶飯事、恵迪不夜城という落書きが壁にも大書してあった。寝られないとイライラしても始まらない。これは、人の声ならずべて許容することに決めた。心をそうセットすると意外にうるさい中でも眠れるものだ。自分を変える挑戦はまだ続けていた。U君が言った。「寮では互いに迷惑を掛け合いながら、それを許容することを我々は学んでいるんだ。」U君は私の2歳年長、いつも考えさせられることを言ってくれる。

教養の授業は高校の復習のようであった。既に高校で習ったものを、同じ程度のレベルで話されるのを聞くのは苦痛だった。5月ともなれば寮の裏は緑が眩しく、カッコウが朝早くから鳴いて気分爽快であった。私には珍しい水芭蕉や、名も知らぬ草ぐさが芽吹いていた。寮を出た足は教室へとは向かわなかった。自然の中のひとときは値千金の感があった。教養の教育では大学に期待した目新しいものは少なかったが、ドイツ語と、選択でとった法学の「法の精神」の講義が面白かった。西洋史の時間には講義を聞きながらシュトルムやゲーテやハイネの詩集を読んだ。

「明日から試験だ。激励ストームをやるぞ。」応援団たるもの、勉学の応援もせにゃならん。焼酎とコップが運ばれ、寝台のふとんがめくられて畳が顔を出している。こんなことになるとはつゆ知らず、一夜漬けを狙って勉強などさっぱりしていなかった私にとっては大パニック。開き直すより仕方ない。まずは前祝いのコンパ。真夜中までひたすら飲んでいよいよ全寮ストーム。「さーめよ、迷いの、夢さめよー」スキー板を片手にふんどし一丁、これがストームの正装。応援団たるもの正式にやらねばならぬ。各部屋をノックして入り、「札幌農学校は蝦夷が島、熊が棲む。荒れ野にたてたる大校舎、こちゃエルムの木陰で、真理説く、こちゃえー、こちゃえー」とスキー板で床をたたきながらけんけんで跳

ね回って踊る。試験の前とあってみんなある興奮状態で起きて勉強中。いい気分転換のようだ。踊り終わると室員全員と握手をし、「頑張れよ」と激励して次の部屋へ。ストームが来たらたとえ寝ていてもベッドの上に半身は起こして手拍子を取り、ストームをかけた連中と全員握手するのがストームマナー。60室300人の寮生全員と握手し終える頃には夜は白々とあけてくる。「ああー、俺の試験は...」かくして試験答案には「都ぞ弥生」の全歌詞を清書するはめになる。

七大学戦が近づくとみんなでバイトをして旅費稼ぎをした。北大応援団の安宅宗彦先輩が全国を走り回って、学長にも会い、それまで各部がバラバラな時期に独自に開催していた定期戦を一本にまとめ、七大学戦とした。学生の力で良くやったと思う。我々はそれをほこりとした。北大から時々そう言う逸材が出る。60年安保の全学連委員長、唐牛健太郎も北大生であった。七大学戦では他大学応援団との交流会がある。北大応援団がいつも他を圧倒して中心的存在であった。他大学に入学していたら、きっと北大に憧れたことだろう。事実、名古屋大学の応援団長だったS氏は憧れて自ら長髪にし、羽織袴で歩いた。今は異色の愛知県議会議員。懐かしい仲間である。七大学戦では問題が一つあった。他大学応援団は3年生か4年生が団長なのだ。北大は2年生が団長。団長としては対等に振舞うわけだが、上級生の他大学団長に申し訳ない。U君と話した。U君が2年目で団長になった。そして私が3年目で団長になり、北大応援団を3年制とした。

夏休み、七大学戦の応援を終えて故郷の藤沢に帰った。近所の奥さんが「お宅に乞食が入った」とおふくろに伝えた。東大に行った同級生と会った。彼等

ストーム（『平成13年度寮歌集』から）

はデカンショを論じまくった。哲学書を読みあさっては知識をひけらかし、知識量の競争をしているようであった。机上の空論が空しく、学風の違いと、大学での体験の違いを感じた。恵迪寮での濃密な体験が彼等の空論を子供じみたものと感じさせた。次の年に彼等に会った時には彼等も哲学の知識のひけらかしっこを止め、嘘のように謙虚になっていた。

恵迪寮は当時は教養生の寮であった。2年間はあっという間に過ぎた。政治問題での議論は毎日。10円の寮費値上げに延々夜中の1時2時まで寮生大会の論議が続く。なんとという濃密な、なんとストレスの多い、なんと消耗な、なんとすばらしい、なんとけがれのない2年間であったのであろう。私の18歳の価値観はがらりと音をたてて崩れ、価値の基準さえ不確かになった。私の中のそれまでの既成概念も崩れ去った。そしてより強固な価値観の再構成がなされ、より柔軟な概念が形成された。人と人とが触れ合うすばらしさを学んだ。みな基本的にはいいやつなんだ。寮生活も終わりに近づいた頃、U君が言った。「こうして寮生活をとおして我々が学んだものは、いかにして人を愛するかということなんだ。」

入学後1年半経ると学部移行というのがあった。進学希望学部を成績で振り分けられる。私は第一志望を医療電子工学と書いた。そんな学科は無かったが、とにかく医療電子工学に興味があった。第二希望は獣医、第三希望を薬学にした。獣医に決まった。当時獣医は人気がなく、欠員が出て、水産学部からの転部希望者も受け入れていた。応援団のU君もN君も獣医に決まった。U君はその後いきさつがあって工学部に移った。

獣医にきた他の応援団員、N君は卒業後、人類学に目覚め、文学部の修士課程に進学、学費がなくなると工業高校出身の強みを活かしてトヨタ工場で図面引きのバイトをしながら、学問を続けた。スワヒリ語に魅せられ、東京外語大学の教授の無給鞆持ちを買って出て、スワヒリ語を学んだ。現在は大阪外語大学のスワヒリ語教授。獣医師の肩書きを持つスワヒリ語教授は珍しいだろう。応援団副団長をつとめたS君は、獣医学部卒業後武田製薬で新薬を開発し、会社におおいに貢献したが、請われて鳥取大学農学部獣医学科の薬理学教授に就任した。

(次号に続く)

## センター日誌

CENTER EVENTS, February - March

### 2月

- 5日 ・ (会議) 第69回センター運営委員会
- 6日 ・ (会議) 第13回教務委員会教務情報システム専門委員会
- 7日 ・ (会議) 第22回生涯学習計画研究委員会
- 12日 ・ (会議) 第22回公開講座専門委員会
- 14日 ・ (会議) 平成13年度第4回予算・施設委員会小委員会
- 18日 ・ (会議) 第5回教務委員会教育システム弾力化検討専門委員会  
・ (会議) 第90回全学教育委員会小委員会
- 19日 ・ (会議) 第26回予算・施設委員会  
・ (会議) 第20回高等教育開発研究委員会  
・ (会議) 第3回入学者選抜企画研究委員会
- 20日 ・ (会議) 第15回教務委員会共通授業検討専門委員会
- 21日 ・ (会議) 第43回全学教育委員会
- 22日 ・ (講演会) 「面接研究の理論と展望」
- 25日 ・ センターニュース第40号発行
- 27日 ・ (会議) 第44回センター運営委員会  
・ (会議) 第22回教務委員会幹事会
- 28日 ・ (訪問) 名古屋大学高等教育研究センター中井俊樹講師他3名(高等教育開発研究部)

### 3月

- 1~2日 ・ (ワークショップ) 一般教育演習のガイドラインづくり(支笏湖丸駒温泉)
- 5日 ・ (会議) 第70回センター教官会議
- 6日 ・ (会議) 第23回公開講座専門委員会  
・ (会議) 第19回教務委員会
- 8~16日 ・ (説明会) 北大説明会(札幌北高, 札幌西高, 羽幌高, 函館東高, 札幌月寒高)
- 18日 ・ (会議) 第91回全学教育委員会小委員会  
・ (訪問) 新潟大学理学部渡辺勇一教授(高等教育開発研究部)
- 22日 ・ (会議) クラス担任代表会議, 全体会議  
・ (説明会) 北大説明会(立命館慶祥寒高校)
- 24日 ・ (講演会) Z会北大進学講演会
- 26日 ・ (訪問) 防衛大学校総合教育学群長佐藤紘志(高等教育開発研究部)
- 27日 ・ (シンポジウム) 「教養教育と地域連携」(国際基督教大学) 絹川正吉学長; 「ゴーイングシラバスでe-learningはどこまで可能か」(名古屋大学高等教育研究センター) 池田輝政教授

# 行事予定 SCHEDULE, May - August

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
5月	上旬 ~ 下旬	定期健康診断	
6月	6(木)	開学記念行事日	休講
	6(木) ~ 9(日)	大学祭	休講
7月		【17(水)に月曜日の授業を実施】	
	23(火) ~ 25(木)	補講日	
	26(金)	第1学期授業終了	
	29(月) ~ 8月8(木)	定期試験	
8月	9(金) ~ 13(火)	追試験	
	9(金) ~ 9月27(金)	夏季休業日	
	29(木) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	

## センターニュース 2002, No. 41 目次

巻頭言 .....	徳田 昌生 .....	1	第44回全学教育委員会開催される .....	9
特集：2002年度のプロジェクト			「一般教育演習のガイドライン」を配布 ....	11
高等教育開発研究部			TA研修会開催される .....	11
..... 小笠原正明 .....		3	客員教授にソウル大学の權斗煥氏 .....	15
プロジェクト1：			「北海道地域インターン	
「技術と人間の倫理」 .....		3	シップ推進協議会」設立される .....	15
プロジェクト2：			<エッセイ>	
教養科目「PMFの響き」を中心に .....		5	北大旧教養教育の評価 個人的体験(1)	
プロジェクト3：			..... 藤田 正一 .....	16
e-Learning システム導入のための研究 .....		7	センター日誌 .....	19
新しい研究部長とセンター長補佐きまる .....		8	行事予定・目次・編集後記 .....	20
6月6日に新任教官研修会 .....		8		

### 編集後記

今月から3回にわたり、各研究部の今年度のプロジェクトを特集します。連載エッセイは、教養教育をどのように評価すべきかを問いかけています。環境心理学者 R. Moosによると、学生の満足ややる気は、交流、支持、誠実、友情など関係を強調する社会環境によって促進され、個人的成長や生産性は、競争、仕事中心、独立など個人発達を強調する社会環境によって育てられるそうです。入学後の学生が伸びていくためには、この二つの相反する動機付けのメカニズムが有効に機能するプログラムや支援組織が望まれます。(碧)

### センターニュース 第41号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2002年4月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center